石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第399号　平成29年1月1日発行

絵画にみる江戸のくらし
―浮世絵版画を中心に―

歌川国芳《五節句之内 睦月》

新年のご挨拶

東京国立近代美術館工芸館 名品展 近代工芸案内

新春優品選【前田育徳会・古美術・工芸・絵画・彫刻】

書の美

没後30年 高光一也の世界

人体彫刻考1 ―手は語る―

- 文化財現地見学報告
- 1月の行事予定
- 講演会記録（宝木範義氏、山崎達文氏）
- アラカルト ただいま展示中

2017
新年のご挨拶

石川県立美術館館長 嶋崎丞

あけましておめでとうございます。

石川の美術のなかで工芸は際立っており、石川の文化を代表する個性となっています。平成二十九年は工芸について、今一度考えてみる機会になりそうです。

日本の工芸の現状と課題、百年後の展望を議論する「21世紀鷹峯フォーラム」石川・金沢大会が、十～十一月に石川県で開催されます。工芸に関わる美術館や博物館、文化・教育施設がすべて参加して実施されることになっています。多くの方の参加をお待ちしています。

また東京国立近代美術館の工芸館が、平成三十二年度までに引越新設されることになっています。その収蔵品の事前公開が当館で開催中です。

平田郷陽《清泉》
東京国立近代美術館

―浮世絵版画を中心に―

◆主催／石川県立美術館

平成29年1月4日（水）～2月12日（日） 会期中無休

歌川広重
《名所江戸百景
上野山内　月のまつ》

一月四日から、いよいよ「絵画にみる江戸のくらし」展が始まります。本展覧会では、浮世絵に描かれた人々の姿から、江戸時代のくらしを感じていただきたいと思っています。他の絵画作品と比べると小さな浮世絵ですが、じっくり見てゆくと、驚くほどたくさんの情報がつまっています。

例えば、本誌の表紙に掲載している歌川国芳《五節句之内 睦月》は大判三枚続きの浮世絵で、粋な装いの女性が一枚に一人ずつ、子どもを伴って描かれています。背後にそびえる富士山と、左脇に見える「井桁に三」が染め抜かれた三井越後屋の暖簾から、ここは日本橋、駿河町であることがわかります。暖簾前には門松と注連縄が飾られ、奥には大量の酒樽も見えます。そのお隣にはこれでもかというくらいに荷を載せた車、ということは、これは初荷、正月二日の光景でしょう。正月の男子の遊びと言えば凧揚げ、画中にも大凧、トビ凧、奴凧が描かれます。空を見上げて凧を揚げることは、子どもの健康にも良いとされていました。一方、女子は羽根つきです。右の女性が手に持つ羽子板には薄墨で竹が描かれてい

学芸員の眼

浮世絵以外の見どころのひとつが《金沢士庶遊楽図屏風》です。今年度、当館に新収蔵となり、この展覧会で初公開となります。六曲一双の中屏風で、春と秋の情景が描かれています。右隻は満月と紅葉のもと輪踊りに興じる群衆とそれを取り巻く人々、左隻は満開の桜を楽しむ人々です。本作品に描かれる人物の形態は、浮世絵の祖ともいわれる菱川師宣の影響を強く受けています。しかしその筆づかいはいきいきと滑らかで、行楽の賑わいを見事に描写しているといえるでしょう。

◆関連行事

【ワークショップ】
「浮世絵摺り実演＆体験」
日時／1月21日（土）午後3時30分～5時
1月22日（日）午前11時～12時30分、
午後2時～3時30分
会場／美術館ロビー（参加無料）
協力／アダチ伝統木版画技術保存財団

【ギャラリートーク】
会期中の日曜日（1月22日を除く）の午前11時より担当学芸員が展覧会の見どころや作品について解説します。

《金沢士庶遊楽図屏風》右隻

1F企画展示室

絵画にみる江戸のくらし

ますが、これは裏側で、表には、色とりどりの布を用いた押絵で歌舞伎役者の似顔などが表されることが多かったようです。晴れ着で町へと繰り出す人々の顔はみな晴れがましく、新しい年を迎えた高揚感に満ちています。

今回の展示では、喜多川歌麿、歌川国貞、国芳、広重、葛飾北斎などの有名絵師の作品も多く並びます。おなじみの作品もあるかと思いますが、描かれた当時のくらしに想いを馳せてご覧いただければ幸いです。

◆観覧料

一般	六〇〇円（五〇〇円）
大学生	四〇〇円（三〇〇円）
高校生以下	無料

※（ ）内は二〇名以上の団体料金。
※当館友の会会員は会員証の提示により団体料金に割引されます。

【キッズ☆プログラム】
「江戸のくらしミニミニ新聞を作ろう」
日時／1月15日（日）
午後1時30分開始、午後3時終了予定
展覧会を鑑賞して見つけたこと、わかったことを、ミニミニ新聞にまとめてみよう！
集合／美術館講義室（参加無料・予約不要）
観覧料は子ども1名につき保護者1名無料

【土曜講座】
1月14日（土）
「企画展『絵画にみる江戸のくらし』の見どころ」
1月28日（土）
「新出の《金沢士庶遊楽図屏風》について」
2月4日（土）「浮世絵鑑賞入門」
2月11日（土）「江戸時代の展覧会」

《金沢士庶遊楽図屏風》左隻

第5展示室【工芸】

東京国立近代美術館工芸館 名品展

近代工芸案内

12月21日（水）～平成29年2月12日（日）
休館日：12月29日～平成29年1月3日

東京国立近代美術館工芸館が石川県へ移転することになりました。平成三十二年をめどに本多の森にやってきます。当館と歴史博物館のちょうど中間、これまで藩老本多蔵品館があった場所です。工芸の盛んな土地柄として知られる石川・金沢の地に日本海側で初めての国立館として誕生するものです。

東京国立近代美術館と石川県・金沢市では、四年後に迫る移転に向けて、工芸館とその所蔵作品を広く知っていただくため、「東京国立近代美術館工芸館名品展 近代工芸案内」を企画しました。工芸館は昭和五十二年、近代美術のなかで工芸の専門館としてできたものです。千代田区北の丸公園、竹橋の東京国立近代美術館本館から歩いて五分の距離に、近衛師団司令部庁舎を改修して東京国立近代美術館工芸館として誕生しました。日本近代工芸の代表的な作品を収集し、常時陳列する施設として今日まで活動を続け、所蔵する作品は三五〇〇点に上ります。

この展覧会では、その中から、選りすぐった名品の数々をご覧いただくことで、工芸館移転をひろくPRするとともに、工芸館の活動を県民・市民に知っていただく機会とするものです。工芸館ができるまでの期間、当館を利用して展覧会が開催されていきます。

会期中、タッチ&トークやギャラリートークも予定されています。ご来場をお待ちします。

※本展の観覧料は、コレクション展観覧料に含まれます。
（友の会会員は会員証の提示により無料となります。）

松田権六《蒔絵槇柏文手箱》
東京国立近代美術館

前田育徳会尊經閣文庫分館

新春優品選

12月21日（水）～平成29年2月12日（日）
休館日：12月29日～平成29年1月3日

年末から始まる「新春優品選」では、伝雪舟の重要文化財《四季花鳥図屏風》を公開します。よく「なぜ『伝』雪舟なのですか？」というご質問を受けます。「本物ではないのですか？」と聞かれることもあり、困惑することもしばしばですが、今号でお答えしてみましょう。

雪舟研究について語り出すと、この誌面では到底足りないのですが、ひと言で表すならば「いつの時代も常に画聖として語られ続けてきた人」と言えます。後の長谷川等伯が自身を正統化して「雪舟より五代」と名乗ったように、江戸時代以降、雪舟の神格化は更に進みます。

本屏風の両脇に「行年七十一雪舟筆」とありますが、これは雪舟本人が記したのではなく、後の時代に「本屏風は雪舟が七十一歳の時に描いた作品である」と語られていたことを意味します。神格化された雪舟と伝えるさまざまな絵画が、世に出ていたのです。雪舟画は常に人気でした。

そして、雪舟没後から五百年以上が過ぎた今日、我々はそれらの絵画を前に、その真の姿に迫ろうと試みます。育徳会が所蔵する本屏風と似た、雪舟と伝える花鳥画が複数存在することから、雪舟がこのような絵画―樹木を屈曲させた装飾的な花鳥画―を描いたことは間違いないと考えられており、江戸時代より前田家に伝わる本屏風は、その真の姿を知るには外せないもののひとつに位置づけられています。「伝」には、こうした重要な意味合いがあるのです。

重文 伝雪舟《四季花鳥図屏風》右隻

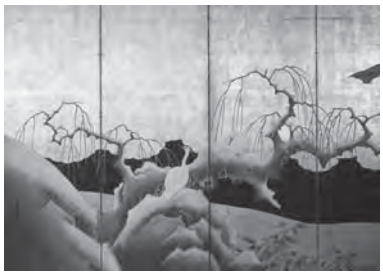
第2展示室【古美術】

新春優品選

12月21日（水）～平成29年2月12日（日）
休館日：12月29日～平成29年1月3日

今回は、新春にふさわしく吉祥的なモティーフと、茶道美術の優品を取り合わせてみました。絵画では、まず室町時代十五世紀の画家・元賀の《小鳥に萱草（かんぞう）図》をご紹介します。萱草の花と、それを眺めるジョウビタキは厳密に考えると季節が夏と冬で合わないかもしれませんが、そのことが、本作が吉祥図として描かれたことを端的に示しています。ジョウビタキは長寿や心の慰めに結び付き、萱草には見る人の憂いを忘れさせ、心が晴れやかになる作用があると信じられてきました。そこで来年が酉年であることも合わせて、最初に本作を展示しました。続いて、狩野尚信の《柳鷺図》（県文）に注目したいと思います。柳は、東洋において長寿・繁栄を象徴し、恵みの雨を降らせるものと認識されてきました。本図は夏と冬の景として、柳と水鳥である鷺が集合的に描かれています。そこには、家族や一門の長寿や繁栄を願うという意味がこめられていると解釈することができます。そして、こうした吉祥的モティーフを金と群青の絶妙な対比の中に効果的に配置している点に、兄の探幽とともに新たな狩野派の画風を打ち出した尚信の力量がうかがえます。

今回はさらに、野々村仁清の《色絵梅花図平水指》（重文）やデルフト陶の《和蘭陀白雁香合》（県文）、そして《粉引茶碗 銘楚白》（県文）など、全国的に高く評価されている茶道美術の優品もあわせて展示します。また高山右近の列福を記念して、《高山右近書状 休庵公宛》（金沢市文）を一月二十八日（土）～二月十二日（日）の期間特別展示します。



県文 狩野尚信《柳鷺図》（左隻部分）

第3展示室【書・近現代絵画】

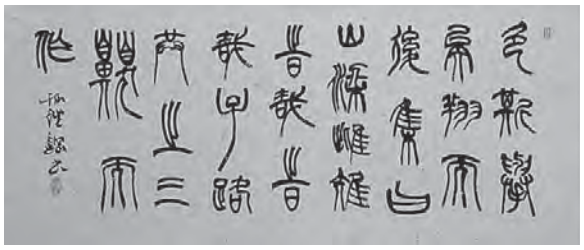
書の美／優品選

12月21日（水）～平成29年2月12日（日）
休館日：12月29日～平成29年1月3日

今から三千数百年前の古代中国で生まれた漢字ですが、始まりは神と人間の橋渡しとして存在しました。やがて国家の成立に伴って、漢字は情報伝達のツールとして人間社会で使われるようになり、今日に至っています。漢字はその長い歴史の中で、無数の人の手によって少しずつ変化し、篆書・隷書から草書・行書・楷書という書体が生まれてきました。また、各時代の文化や思想を背景にしながら、文字本来の機能とは別に美的側面から育まれ、独自の趣や個性を示す様々な書風も展開しその芸術性も高められていきました。今回の展示ではこの書体や書風に注目し、書人の心を引きつけてやまない漢字の書をご紹介します。

同会場にて絵画・彫刻の新春にふさわしい優品も展示します。来年の十二支は「酉」。干支が成立した殷代、「酉」はもともと酒つぼを表し、果実など収穫物が熟成した状態から、実りの意味を持ったようです。そこに動物の鶏をあてるようになったのは、紀元前の二世紀頃まで時代が下がります。今回は「酉」本来の意味にちなみ、「みのり」をテーマにすこし作品を選んでみました。

日本画からは稲元実《壌》を紹介します。家族が縦一列に配置された構図の背景には、よく見ると葡萄が配されています。題名の「壌」が示すとおり、ここでは豊穣なる大地、「めぐみ」や「みのり」を表しているようです。このほか木彫の山本力吉《微風》、油彩では村田省蔵《春めく》を展示します。



平尾弧往《論語郷党篇》

第4展示室【近現代絵画・彫刻】

没後30年 高光一也の世界
人体彫刻考1 ―手は語る―

12月21日（水）～平成29年2月12日（日）
休館日：12月29日～平成29年1月3日

【没後三〇年 高光一也の世界】

洋画家高光一也（一九〇七～一九八六）没後三〇年に際し、当館所蔵品を中心に回顧展を開催します。

昭和期の石川洋画壇を牽引した高光氏の画業は、郷土を離れず常に金沢にあって後進の指標となり、大輪の花を咲かせたものでした。氏は画家であると同時に真宗大谷派の僧侶であり、生きる喜びを説くように、「明るく、健康な絵」をモットーに、輝かしい女性像を描き続けました。

写実を根幹としますが、時代のモードを鋭敏に取り入れて画業は多彩な展開を見せています。とらわれない融通無碍の心が、一つのスタイルに固執することなく、ほぼ十年を一区切りに新たな作風を築き上げていったのでしょう。

本特集では各時代の代表作とともに、近年収蔵した小品を含め、幅広い高光氏の画業のあゆみをご覧いただきます。

【人体彫刻考1 ―手は語る―】

本展は人体彫刻において、特徴的な仕草の手の作品や豊かな表情を示す手の作品をお楽しみいただくものです。

人体をモチーフとした彫刻・美術において手や指先の仕草や表情には、目や顔の表情にも勝る表情や主張をしている場合がみえ、同じようなポーズでも手の表情によってその印象が大きく異なる場合があります。豊かな表情を伴う手は作品の制作テーマを代弁し、持物と併せ作品の背景や時代を物語り、作品全体の雰囲気を統一するアイテムとしても機能しているようです。展示では約十三点の個性・特徴的な手の表情を示す人体彫刻をご覧いただき、手の表す表情と感性をお楽しみいただきますようご案内致します。

吉田三郎《男立像》

高光一也
《二人（壺を持つ女と）》

第6展示室【工芸】

新春優品選

12月21日(水)～平成29年2月12日(日)
休館日:12月29日～平成29年1月3日

今回は第6展示室において、近現代工芸の新春優品選を行います。いつもご来館いただいている地元の方だけでなく、観光で訪れる方々や帰省で石川県に滞在する方々も楽しめるように、石川県に縁の深い作家の選りすぐった作品を展示します。

展示室に入ってすぐ正面で、蒔絵の人間国宝・寺井直次の《金胎牡丹蒔絵箱》をご覧いただきます。寺井が得意とする卵殻で、白漆地に大きく牡丹の花を配した意匠が印象的な作品です。右手の壁面には、北出塔次郎の陶片モザイク作品《樹映譜》、《樹海饗宴図》の二点を掛けて展示します。富本憲吉から大きな薫陶を受けたという北出の作品には、色彩や意匠構成など非凡な感性がうかがえます。

展示室奥の移動ケースに配した、木工芸の人間国宝・川北良造の《欅造食籠》は、平成三年の台風で倒れた兼六園の欅材を用いた作品です。当時川北に託された材は、県内の優れた木工作家たちで分け合いましたが、その内の一人、福田芳朗の《欅捩梅象嵌三段重》を隣に展示し、全く別の作品となった一本の欅材が二十数年ぶりに邂逅します。また壁面ケースの奥には、近代工芸作家による茶道具の取り合わせ展示を行います。年末と年始で少しずつ作品を入れ替えますので、興味のある方は何度かお越しいただければ幸いです。

第5展示室では同時期に、東京国立近代美術館工芸館の所蔵品を展示します。同じ作家の作品もありますので、どうぞ併せてご覧ください。

寺井直次《金胎牡丹蒔絵箱》

第47回

文化財現地見学報告

平成28年10月22日(土)～23日(日)実施

「古き祈り、新しき旅路」というテーマに沿って、三重県を訪れました。前日まで雨の予報でしたが、見学中はなんとか保ってひと安心です。

専修寺ではお寺の方からご案内をいただきました。平常非公開の安楽庵を含め、伽藍の広さに驚かれる方が多かったようです。そののちバスで斎宮歴史博物館へ移動し、特別展・常設展ならびに映像展示を見学しました。すこし慌ただしくなってしまいましたが、斎王が住んだ土地の空気を感じていただけたのでは、と思います。一日目の最後は賓日館へ。二見浦に佇むモダンな建築をゆっくりご堪能いただきました。

翌日は、朝から朝熊山金剛證寺へ向かいます。ちょうど雲が切れて、伊勢の雄大な景色をご覧いただくことができました。宝物館ではお寺の方に解説をいただき、伊勢神宮とともに歩んできた歴史を学びます。その後いよいよハイライトの伊勢神宮へ。二日間の行程は、この伊勢神宮に捧げられた祈りを軸に、三重の歴史を理解しようとするものでした。グループごとにお伊勢さん観光案内人の方にご案内いただき、じっくりご見学いただきました。

皆さまのおかげで、この度も大きなトラブルなどないまま、無事に終えることができました。ご応募・ご参加いただき、ありがとうございました。

朝熊山 金剛證寺にて

一月の行事予定

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

1月14日(土)	「企画展『絵画にみる江戸のくらし』の見どころ」	村上　尚子
21日(土)	「千利休の茶」	高嶋　清栄
28日(土)	「新出の《金沢士庶遊楽図屏風》について」	中澤菜見子

「近代美術の至宝 ―明治・大正・昭和の巨匠―」

9月18日（日）、美術評論家宝木範義氏による講演会を、
10月2日（日）は金沢学院大学教授の山崎達文氏による講演会を開催しました。

宝木範義氏
「近代美術の展開 ―絵画・彫刻を中心に―」

講師の宝木氏は世田谷美術館の学芸部長として美術館活動に携わってきた、いわば学芸畠のひと。研究者として絵画史に基づく見識と、展覧会の作り手側としての経験に裏打ちされた、大変興味深い内容でした。

まず本展の展示構成から、展示の意図を読み解かれました。印象的だったのは、杉山寧、東山魁夷、高山辰雄という戦後を代表する三人の日本画家と、歴史画の大家、松岡映丘の展示関係について、「歴史」をキーワードとして解説されたことです。そして近年、日本画から「歴史画」が姿を消したことに言及。これは印象派の出現以降、世界的な風潮として、歴史や文化などについて学ばずとも、目の前にあるものを描けばよくなったことに由来する等、示唆に富むお話がありました。さらに、日本の近現代彫刻の流れの中で見過ごされがちな、澤田政廣を本展でピックアップしたことに着目され、本展の企画性を高く評価していただきました。また、脇田和と野見山暁治、宮本三郎と鴨居玲など、作家同士のながれを意識しながら展示を見ることなど、展覧会をたのしむ秘訣についてもお話いただきました。

そのほか、「美術と国家」の観点から論じられたり、多くの作家と交流から生まれたエピソードを紹介されたりと、幅広い見識から展覧会を見なおすきっかけとなる講演でした。

山崎達文氏
「工芸の近代 ―作家の誕生と以降の創作表現―」

東京都生まれの山崎氏は、いったん就職されたものの、工芸に強い魅力を感じて転身、金沢美術工芸大学へ入学されました。大学院で漆芸を専攻され、博物館や卯辰山工芸工房へ就職します。そのころのお話から、講演会は始まりました。

明治ごろ、「工芸」は今よりも幅広い分野を指す言葉として用いられていました。たとえば今言う「工業」もその中に含まれ、その名残か「伝統産業」「伝統工芸」の定義は時によってあいまいだと言います。これは当時、制作する人（職人）と図案を考える人（図案師）が別であったことに起因します。たとえば輸出目的の作品には「売れる」図案が求められ、職人はそれに従って制作を行いました。つまり、政府のリードによって工芸が発展した、と言い換えることができるでしょう。このころの図案は、石川県工業試験場にも伝わり、現在は石川県立美術館に保管されています。

しかし、江戸時代以来のこうした職人・図案師関係は、近代的な展覧会の始まりによって徐々に変化してゆきます。制作者の名前が前面に出る機会を得て、デザインも制作も基本的にひとりで行う、いわゆる「作家」が誕生するのです。現在では石川県から実に多くの作家が生まれ、伝統をふまえつつもオリジナリティを発揮しています。講演会では作品の図版を見ながら、各作家の特色についてお話しいただきました。

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.17

重要文化財 色絵梅花図平水指 いろえばいかずひらみずさし

江戸17世紀 口径23.4×底径20.7×高14.6cm

野々村仁清 ののむら・にんせい

生没年未詳

野々村仁清といえば、まず石川県立美術館の顔として広く親しまれている国宝《色絵雉香炉》が思い浮かぶという方も多いのではないでしょうか。卓抜な造形感覚とともに十七世紀半ば頃の日本においては新しい技法だった色絵の大成者として、また宮廷や武家、寺院など顧客の好みを的確に捉えて制作にあたる敏腕プロデューサーとして、仁清は日本文化史上に不動の名声を確立しました。

この平水指も仁清のセンスが光る名品です。絵画や蒔絵の表現の深い学習成果のもとに、モティーフの梅を円筒形の器面に展開することを入念に計算して、写実性と意匠性を絶妙に融合した色絵と金銀彩の技法を駆使して味わい深く表現しています。梅花を主題とした仁清の名作には、《色絵月梅図茶壺》(重文・東京国立博物館蔵)があります。両者に共通する表現から、本作も月夜に香る梅をイメージしたものと考えることができます。静かに作品を眺めると、ほのかに漂いくる梅の香りと、月光に映る木の姿を意味する「暗香疎影(あんこうそえい)」という言葉も思い浮かびます。恐らく本作の発注者と仁清は、この言葉の出典となった林逋(りんぽ)の詩の表現世界を共有していたことでしょう。

次回の展覧会

会期:
平成29年2月16日(木)
〜3月22日(水)

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第2展示室
天神信仰と文房具	九谷焼の美

第3・6展示室	第4展示室	第5展示室
優品選	人体彫刻考2 ー奏でるー	石川の工芸 女性作家のきらめき

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金

今月の開館時間
午前9:30〜午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00〜午後7:00 年中無休

1月の休館日は
1日(日・祝)〜3日(火)

ガン保険
チューリッヒ生命「終身ガン治療保険プレミアム」
通院治療が増加している時代の、画期的なガン保険
今、ガン保険にご加入されている方も、ご加入されていない方も今すぐチェック!
通話料無料
0037-6001-62094
既にガン保険にご加入されている方に
追加のご加入で、ガンの通院治療の保障を充実
●主契約:放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)
●保険期間・保険料払込期間:終身
月払保険料 1,500円 35歳男性
月払保険料 1,500円 43歳女性
広告有効期限:2017年7月31日　募補16004-20160112
受付時間:10時〜19時(日曜定休)
※一部の固定電話から繋がらない場合がございます。恐れ入りますが携帯電話等でおかけ直しください。
ガン保険にご加入されていない方に
自由設計プランで、ガンの通院治療と診断給付金と先進医療まで備える
●主契約:放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)
●特約:ガン先進医療給付金、ガン先進医療支援給付金(一括15万円)、ガン診断給付金(一括50万円)、悪性新生物保険料払込免除
●保険期間・保険料払込期間:終身
40歳男性 月払保険料 3,216円
広告
《募集代理店》
株式会社ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング
〒160-0022　東京都新宿区新宿5-17-18
ZURICH チューリッヒ生命
※記載の保険料は2015年7月現在のものです。※この欄は商品の概要を説明しています。商品の詳細については、パンフレット、ご契約に関する注意事項(契約概要、注意喚起情報)等をご確認ください。

石川県立美術館だより
第399号〈毎月発行〉
2017年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/